■私の意見

「神戸」の名に恥じない空港を

扇　千景
（国土交通大臣）

今、アジアの国々では、国際ハブ空港の整備が急速に進んでいます。例えば、昨年3月に開港した韓国の仁川空港には、既に4千メートル級の滑走路が2本あり、将来は滑走路を4本にして、1億人の旅客を呼び込むと言っています。中国の上海では、周辺の空港に分散している国際便を全て浦東空港に集約し、しかも浦東空港と上海市内をリニアで結んで、わずか7分で市内にアクセスできる計画を進めています。

一方、我が国の国際空港である成田空港、関西国際空港、中部国際空港はいずれも滑走路が1本。成田の2本目は暫定滑走路のため短く、長距離便には利用できません。関西地域でも、関空、神戸空港、伊丹空港の三空港が旅客を奪い合うような状況であり、このような状況が続けば、アジアの中心は確実に近隣諸国に移り、日本はやがて世界から見向きもされなくなってしまいます。

私は、我が国に「国土のグランドデザイン」が欠けていたことが、現在の状態を招いていると考えます。20世紀は「国土の均衡ある発展」の時代でしたが、21世紀は、各地域がそれぞれの特色を活かして「個性ある地域の発展」を目指す時代です。

そのような観点から、私は、今こそ神戸空港のあり方について、真剣に議論をすべき時期だと考えます。現在、神戸空港は年間発着回数2万回の地方空港との位置付けですが、神戸空港と関空が連携し、国際線を関空、国内線を神戸空港が分担し、あたかも一つの空港のように機能するようになれば、国際線・国内線が一体となった大規模空港の形成が可能です。関空と神戸空港の距離は22kmですから、両空港間の移動はわずか15分程度です。

これにより、関西に、国際線と国内線の乗換が可能な、真の国際ハブ空港が誕生し、経済の地盤沈下が言われて久しい関西の復権に向けた大きな足がかりになります。

また、神戸には、神戸港という国内有数の国際港湾があり、新幹線があり、何よりも阪神淡路大震災から見事に復興を果たした人的財産があります。神戸空港の発展は、国際都市・神戸の飛躍のためにも必要だと考えます。

21世紀という新しい時代に入った今こそ、過去の経緯に引きずられることなく、国家百年の大計に立って、「神戸」の名に恥じない空港のあり方についての積極的な議論を、地元神戸から発信すべきではないでしょうか。

■追悼

句集

風のかたみ

より

装畫　高橋睦郎

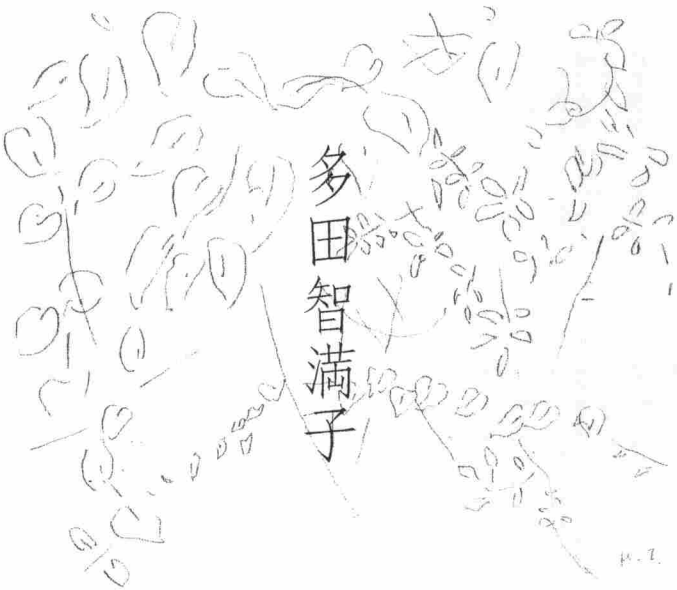
多田智満子

拈華(ねんげ)して乞食(こつじき)微笑(みせう)花の山

曙や花粉まみれの花むぐり

大甕やゆるゆる割れて春の水

水上を見しことなけれ春の川



男女(なんによ)みな行方(ゆきがた)知れず花の雲

庭の花措きて醍醐の花見かな

波は波をくるんで轉(まろ)ぶ春の沙

かげろふに迷ひ入りたる仔猫かな

春の風邪牛の夢見しよだれかな

五百萬年前に生れて落葉焚き

草の背を乗り繼ぐ風の行方かな

（50歳頃）

1930年　福岡県北九州市に生まれる
1945年　桜陰高等女学校に入学
1951年　旧制東京女子大学外国語科を卒業
同年　慶應義塾大学文学部英文科に編入学
1956年　第一詩集『花火』を書肆ユリイカから出版
1960年　詩集『闘技場』を書肆ユリイカから出版
1963年　訳本『ハドリアヌス帝の回想』を白水社より出版
同年　同人誌『たうろす』に創刊より参加
1964年　詩集『薔薇宇宙』を昭森社より出版
1977年　『鏡のテオーリア』を大和書房より出版
1980年　詩集『蓮喰いびと』を書肆林檎屋より出版
1981年　現代詩女流賞受賞
井植文化賞受賞
同年　『魂の形について』を白水社より出版
1995年　神戸市文化賞受賞
1998年　第16回現代詩花椿賞受賞
2000年　『動物の宇宙誌』を青土社より出版
2001年　地中海学会賞受賞
読売文化賞受賞
同年11月　ガンが発見され、急遽神戸大学医学部付属病院に入院
2002年8月　六甲病院緩和ケア病棟に入院
同年　『犬隠しの庭』を平凡社より出版

一九六七年四月号掲載

□随想□

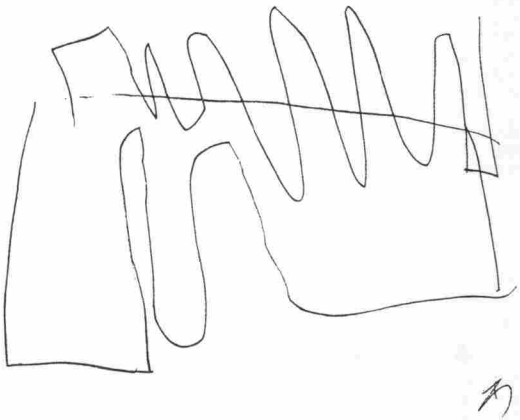
第二のふるさと

田中千代
え・津高和一

神戸は私の第二のふるさととでもいいましょうか、仕事の誕生地です。そして私の仕事を今までに育ててくれた温かいゆりかごでもあったわけで、神戸という言葉を聞いただけで、自分の仕事の赤ちゃん時代、幼稚園、小学校と、その年輪が頭の中に浮かんでくる程なつかしく思われます。

生まれたのは東京、大人になったのも東京ですが、仕事が生れて、仕事が大人になったのは神戸です。私はこの二つのふるさとをもつことが出来て、今本当に幸(しあわせ)だと思っています。東京、神戸、両方の街に足を一本ずつふみつけて立っているような気持ちです。また、私には神戸は別の意味でなつかしい数々の思い出をよびかけてくれる港でもあります。外交官だった父母をもった私は、両親が海外に転任しまた帰国する度に、この神戸の港に行ったものです。当時はホテルもなく、西村旅館という宿屋が元町にありました。亡くなられた西村雅貫氏がしていられた宿ですが、祖母にともなわれたりして、よく私はそこにとまったものです。そこの窓から見下す神戸港、そして海外から船が港に入ってくるのを、それに両親が乗っていると考えて、どんなにまちわびて港を眺めたでしょうか。今思い出すと〝マダム・バタフライ〟がある晴れた日に窓から船の入港するのを待ちわびている光景が思い出される程です。

何時も新しく祖母が作ってくれた友禅のきもの等着て、久し振りの両親の面会を胸おどらせてまっていたのも、神戸でした。外国で生れた弟や、またある時は海外で生れた初めて会う妹が帰ってきたりしました。日本を知らない こうした弟妹



は、また新しいお伽の国に着くような気持ちで船をおりたものでした。何んでも珍しく、靴をはいたまま西村旅館にかけ上がり、あたりを見まわして、ソファーと思ったのか、床の間にチョコンと腰をかけてしまったことは、迎えに来た人達を笑わせたものでした。

そんな弟も、今は国連大使となって働いている姿を思い出すと、五十年の年月はこんなにも世界を変化させ、また、私達も年をとったものだと、考えざるを得ません。西村雅貫氏が、戦後クラブを建てられ、そこに講演に行ったり、ききに行ったり、郷土を愛する人達の集まりの場になっていた頃、私もよく出入りして、なつかしい皆様達に会ったものです。そして遂には私自身が神戸港から出発したり、帰ったりする身になってしまいました。六畳の食堂のテーブルで六人の友達と洋裁のグループを始めたのが、そもそもの私の学校の卵でした。その六人が今では東京の学校も合せて五千人を越える程に成長をしました。この陰には、神戸の皆様の温かい愛情と、ご協力があったればこそと、いま、この原稿を書きながら、神戸の街そして神戸の皆様にお礼をお送りする気持でいっぱいです。元町に出来たカネボウの店で、初めて店の仕事をしたり、雪が六甲の山に積ると、朝五時には早や友達から電話で起こされ、六甲には雪が何糎位ありそうだから早速出かけようといったさそいがかかってきたものです。

何時も準備のととのっている私は、早速スキーをはいて、六甲までかけつけ、ロープウェーで上まで上り、今の表ドライブウェーを、ロープウェーの出発点迄滑りながら、それを二、三回すると、雪もとけてしまうといった、雪のとけぬ間のしばしのスキーのスリルを味わったのも、あの六甲です。こうして、カネボウのおつとめに、またグループの洋裁にと、ただちにとりかかるという若き良き時代を味あわしてくれたのもあの山です。

海と山にめぐまれ、犬を連れての散歩、お弁当をもって子供を連れてのハイキング等々、若いし仕事時代の裏に、そのエネルギーと休息がその自然によって与えられました。

東京と神戸を十五時間〜十六時間もかかって寝台列車、特急が出来て八時間半、遂に新幹線の超特急三時間十分、そして飛行機の四十五分と、五十年の旅の歴史も味わいました。

食物も、外人の多い神戸では、デリカテッセンのソーセージ、チーズ、ドンクのパン、そしておいしい中国料理、灘のお酒、新しいお魚、味覚の上でも日本一といっても良い程、味を楽しませてくれたところです。

日本中に数多くの街がありますが、神戸という所は全く日本に一つしかない国際的で、多様性をもつ不思議な街で、その中に独特の情緒をもっています。一時は飛行機時代全盛で港というものは影薄い気持ちでしたが、またかえって本当の旅を楽しむ人は船を利用するようになり、神戸港の新しい生命が、また開かれることでしょう。一度、昔思いもよらなかった大きな豪華船で、静かに入港してみたい気持ちです。ジェットのスピードとは正反対の欲望もまた人間には不思議とあるものです。百年の歴史を土台にし現代に生きる港として、新しい発展をねがわずにはおられません。

〈服飾デザイナー〉

●第十三回 神戸っ子賞

元町のたおやかなウーマンパワー

下村俊子に

■選考委員

米花稔さん
〈神戸大学名誉教授〉

新野幸次郎さん
〈神戸都市問題研究所所長〉

石阪春生さん
〈画家〉

武田則明さん
〈建築家〉

小泉美喜子さん
〈月刊神戸っ子編集長〉

■選考経過

昨年までの12回の受賞者を振り返り、ぜひ今年は女性に授賞してはどうかという意見が出された。女性では、神戸を舞台にした作品を手がけたり、神戸との縁も深い作家・**田辺聖子**、世界的に活躍しているヴァイオリニスト・**辻久子**、絵本作家・**永田萌**、コーヒーひとすじのにしむら珈琲店オーナー・**川瀬喜代子**、書家・**望月美佐**、そして女性経営者倶楽部初代会長や元町ミュージックウィーク実行委員長などの地域活動にも功績の大きい（株）神戸凧月堂社長・**下村俊子**が挙がった。また昨年逝去した神戸婦人団体協議会初代会長・**土井芳子**の死が惜しまれた。

その他、元神戸市長・**笹山幸俊**、棋士・**谷川浩司**、SF作家の大家・**筒井康隆**の名前も。経済人では、スポーツ界にも貢献する（株）ノーリツ会長・**太田敏郎**、（株）フェリシモ社長・**矢崎和彦**、神戸華僑総会名誉会長の**林同春**の国際的な活動も評価された。

下村俊子への授賞は、神戸凧月堂のゴーフルが誕生して75周年を迎えたことや、同社が主催するロドニー賞、文化ホールなどの文化事業への貢献が決定した。4代目社長として、あまり表には出ないが、さまざまな場で縁の下の力持ちの活動をしていることが評価された。

歴代受賞者

1. 淀川長治〈映画評論家〉
2. 朝比奈隆〈指揮者〉
3. 陳　舜臣〈作家〉
4. 宮崎辰雄〈前神戸市長〉
5. 中内　功〈ダイエー会長兼社長〉
6. 中西　勝〈画家〉
7. 東山魁夷〈画家〉
8. 妹尾河童〈舞台芸術家・エッセイスト〉
9. 高村　勤〈コープこうべ名誉理事長顧問〉
10. 新野幸次郎〈神戸都市問題研究所所長〉
11. 鬼塚喜八郎〈アシックス会長〉
12. 貝原俊民〈前兵庫県知事〉

■推薦のことば

今回は、今までの受賞者が男性ばかりだったので、ぜひ女性にという意向で選考にあたった。

神戸凧月堂の下村俊子社長は、吉川進・冬季子夫妻を両親に育まれた元町の老舗のお嬢さんで、熱心なクリスチャン。ご主人の下村光治さんが、製菓業からホテル業と幅広い活躍のあと、ガンで倒れられてからの女性社長。

本業のゴーフルや、マロングラッセに力を入れ、母上のオリジナルである創作和菓子「源氏の由可里」を中心に和の世界も充実、和洋菓子づくりに情熱を。来年、元町が一三〇周年を迎える。その女性懇話会の代表となりウーマンパワーを発揮。元町ミュージックウィークの実行委員長も引き受け、イベントも定着した。また、元町の　月堂本店では「もとまち寄席」を続けて一〇〇回記念が四月に。夏目俊二率いる「コメディ・ド・フーゲツ」も人気定番番組。

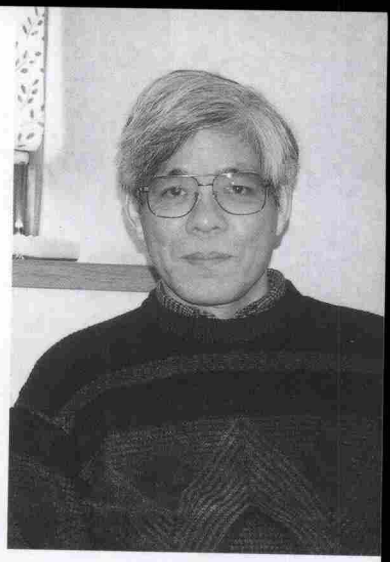
一方、神戸女性経営者倶楽部の初代会長として活躍、今年、二代目伊藤会長にバトンタッチし、五月には近畿大会が神戸で開かれる。

現在では栄光教会の再建に奔走。後継者の下村治生常務取締役も神戸JCの専務理事。

品格あるお人柄にファンも多い。

〈小泉美喜子〉

昨年のロドニー賞受賞式より。受賞者・ギャラリー島田の島田誠さんが、選考委員長で作家の陳舜臣さんから賞を受けた（写真▲）。和菓子「源氏の由可里」が紹介された本を手にする下村社長（写真▼）



●第三十二回 **ブルーメール賞**〈文学部門〉

山陰に惹かれ、歩き、描く

上村武男に

と評された散文、**三輪正道**『酔夢行』（編集工房ノア）。貸本屋に出入りしていた少年少女たちのその後を描いた連作、**小野滋子**『貸本夏冬堂』（編集工房ノア）、**水嶋元**『道元』（東洋出版）。小さな街の本屋の奮闘を書いた**川辺佳展**『街の本屋が「カァ！」と啼く』（幻堂出版）。

右／「千鳥月光に顕つ少女」
左／「山陰を旅する人たち」（いずれも編集工房ノア刊）

■選考委員

島京子さん〈作家〉

竹内和夫さん〈作家〉

野元正さん〈作家〉

■選考経過

選考で挙げられた作品は、まず**上村武男**『千鳥月光に顕つ少女』（編集工房ノア）。同氏は、一九九〇年に出版された『山陰を旅する人たち』など山陰に目を向ける作品を手がけてから、筆力への評価が高まった。**山田幸平**『ひきがえると月』（編集工房ノア）。「ゆるゆる世界にどっぷり浸される」

歴代受賞者

1. 中村　隆〈詩〉
2. 鄭　承博〈小説〉
3. 小泉八重子〈俳句〉
4. 福元早夫〈小説〉
5. 三宅　武〈詩〉
6. 秋吉　好〈小説〉
7. 江頭越子〈詩〉
8. 桜井利枝〈小説〉
9. 梅村光明〈詩〉
10. 吉保知佐〈小説〉
11. 季村敏夫〈詩〉
12. 福岡勝利〈小説〉
13. 時里二郎〈詩〉
14. 松尾美恵子〈評論〉
15. 武田信明〈詩〉
16. 山西史子〈小説〉
17. たかとう匡子〈詩〉
18. 森　栄枝〈小説〉
19. 田中紀子〈詩〉
20. 夏巳ゆらこ〈小説〉
21. 渡辺信雄〈詩〉
22. 吉田典子〈小説〉
23. 村中秀雄〈詩〉
24. 大塚雅子〈評論〉
25. 増田まさみ〈詩〉
26. 野元　正〈小説〉
27. 岩崎風子〈詩〉
28. 毛　丹青〈エッセイ〉
29. 由良佐知子〈詩〉
30. 北原文雄〈作家〉
31. 今村欣史〈詩〉

千鳥も日記を書いた。けれども、千鳥の日記は、まるではじめに死があって、一日一日ごとに、浜辺に出るように、ほんとうの生命に近寄っていくかのようだ。〈この日の夕方、この日記を電燈の下で面白がって書いてゐた。「けむり」の詩も前後して書いた。そして翌朝は熱発してそのまま、永劫の眠りについた〉と、母親は記している。

「海と約束しているから」

といって、毎朝毎朝、暗いうちから家の近くの浜〈祖母といっしょに出かけていったのだという。

・・・頭脳も感性も、とびきりな発達を示しはじめていた少女千鳥。だが、その人生の出立は、そのままたちまち、帰還であるほかはなかった。

まこと千鳥は、そんな、まだ夜も明けきらない海に立ち、しんしんと青白い月光に誘われて、そうして竹取物語のかぐや姫のように、「約束」どおり、そっちの世へ還って行ってしまったのであろう。

わたしは、田中千鳥という一人の山陰の見知らぬ少女が書き遺した詩と文章に接し、極度の短命とその死の光景を伺い知って、千鳥の表現というものは、敢えて名付けるなら、月光の文学、いや月光にのみ顕つ言葉ではないだろうか、あわあわとした天地人生の陰を踏む素顔のようなものではないかなどと考えてみる。そして、千鳥よ、わたしの千鳥よ、

「月光は淡し。されど、月光より深く明るきものもなし」

なんにもできないわたしは、棒立ちして、ただそう胸のうちに呟くばかりである。

—『千鳥月光に顕つ少女』より

■**推薦のことば**

受賞作となった『千鳥月光に顕つ少女』は、書名そのものが、一編の詩であり歌を思わせる。詩精神が根のところに流れている。

著者は、尼崎生まれであるが、ことのほか山陰に惹かれている。〈わが魂の幻境〉と言い、山陰にかかわりのある文学者、芸術家の文学土壌をさぐる評伝紀行『山陰を旅する人たち』（正・続）を書いている。山川登美子、前田純孝、因幡源左、河井寛次郎、田畑修一郎、香月泰男、金子みすゞ、種田山頭火、小泉八雲、安野光雅…といった人たち。

本書では、そうした〈私と山陰〉を書き、田中千鳥に出会う。一人の少女。大正六年に生まれ大正十三年に、小学二年生で死んだ。少女は詩と日記を書き『千鳥遺稿』が残された。その復刻版を読んだのである。「ふしぎな感銘に浸された」「千鳥の言葉は死を抱き、死を視ている」「天与のように、いやしいところがすこしもない」。そして山陰へ旅する。砂浜、海の描写がすぐれて美しい。静と動がある。この人の本領だろう。

後半は、肉親のこと、自殺した祖母のこと、教育者でも俳人でもあった父のことが、愛惜を持って描かれる。全体に流れる人間の哀切の文に惹かれた。〈野元　正〉

●第三十二回 **ブルーメール賞**〈音楽部門〉

日本の合唱界に新風をおこした

松原千振に

■選考委員

小石忠男さん
〈音楽評論家〉

響敏也さん
〈音楽評論家〉

中西弘則さん
〈神戸新聞文化部編集委員〉

■選考経過

着実に活動し、毎年候補に挙げられている音楽家も多い。ピアニストの坂本恵子、世界的に評価の高い小曽根真、マリンバの**名倉誠人**、若手ヴァイオリニスト**木嶋真優**。指揮者の**中村健**、そして合唱指揮者・**松原千振**、**本山秀毅**の名前が挙がった。またヴァイオリニストの**小栗まち絵**は、松方ホール音楽賞の選考委員をつとめるほか、弟子も多く、世界で活躍している若手ヴァイオリニストのほとんどが彼女の門下生だといってもよい。地元の混声合唱団・**ザ・タローシンガーズ**の活躍、そして企画力が評価された。昨年、松方ホール音楽賞など数々の受賞に輝いたソプラノ・**尾崎比佐子**の実力は充分評価に値する。まさに旬の彼女に授賞してはという意見と、フィンランドで活躍を続けていたものの国内ではあまり栄冠を与えられることのなかった松原千振に授賞をと意見が別れたが、結果、地元の民謡を新しい形で生まれ変わらせるなどの地域的な活動も認められ、松原千振の授賞となった。彼の受賞によって、今まで合唱団というと地味な存在と思われがちだったが、世界と直結する合唱活動というものが神戸でも成り立つようになってきたことも伺える。

歴代受賞者

1. 田原富子〈ピアノ〉
2. 矢野恵一郎〈合唱指導〉
3. 上月倫子〈バレエ〉
4. 今岡頌子〈バレエ〉
5. 小石忠男〈音楽評論〉
6. 中村茂隆〈作曲〉
7. 関　晴子〈ピアノ〉
8. 坂本　環〈声楽〉
9. 山内鈴子〈ピアノ〉
10. 松本幸三〈声楽〉
11. 伊藤ルミ〈ピアノ〉
12. 井上和世〈声楽〉
13. 末広光夫〈プロデュース〉
14. 安芸栄子〈声楽〉
15. 延原武春〈指揮〉
16. 中西　覚〈作曲〉
17. 青井　彰〈ピアノ〉
18. 広岡隆正〈声楽〉
19. 戎　洋子〈ピアノ〉
20. 大前　哲〈作曲〉
21. 中野慶理〈ピアノ〉
22. 田中修二〈ピアノ〉
23. 岡本一郎〈リュート〉
24. 畑　儀文〈声楽〉
25. 釜洞祐子〈声楽〉
26. 「アート・エイド・神戸」〈プロデュース〉
27. 鈴木雅明〈指揮・チェンバロ〉
28. 北浦洋子〈ヴァイオリン〉
29. 林　裕〈チェロ〉
30. 井原秀人〈声楽〉
31. 田中敬子〈ピアノ〉

2002年12月 神戸聖愛教会クリスマスチャリティコンサートにて（神戸中央合唱団）

■推薦のことば

松原千振さんの指揮は、合唱メンバーそれぞれの個性を生かす。個性を抑え、均質さを目指しがちな旧来の音づくりとは異なるスタイルは、日本の合唱界に刺激を与えている。「日本に本格的な合唱指揮者が登場した」と、その評価は極めて高い。

松原さんの歩みは、合唱一筋といっていい。小学一年の時、国立音楽大学合唱団の学校公演に触れて合唱のとりこに。小・中・高校は合唱部に所属。その後、合唱指揮者を目指し、世界屈指の合唱先進国・フィンランドのシベリウス音楽院に留学。同地を代表する合唱団などの指揮者として十六年にわたり研さんを積んだ。

九年前に帰国。以降、「神戸中央合唱団」、「東京混声合唱団」の各常任指揮者を務める一方、若手の育成を目指し「ジャパンユース合唱団」を結成、日本の合唱の未来も見据える。

古典はもとより、現代曲にも力を注いでおり、「フィンランド時代に培った知識や体験を基（松原さん）」に作曲家とのコラボレーション（共同作業）にも積極的。神戸中央では、地元・兵庫、神戸の埋もれた民謡なども発掘、演奏に努めている。いまや松原さんは、日本の合唱界に欠くべからざる存在となった。今回の受賞が、さらなる飛躍へのステップとなるよう期待したい。

〈中西弘則〉

●第三十二回 **ブルーメール賞**〈美術部門〉

体ごとぶつかる鉄のアーティスト

塚脇淳に

■選考委員

中島徳博さん
〈兵庫県立美術館館長補佐〉

河崎晃一さん
〈芦屋市立美術博物館学芸課長〉

岡田弘さん
〈元町画廊社長〉

■選考経過

神戸出身で、現在は東京、京都、海外などに活動の場を移している作家が多い。また、絵画の世界では抽象と具象の境目がなくなってきたとの意見も出た。具象では、昨年ギャラリー島田で個展を開いた**井上よう子**の雄大な世界が新鮮。コンスタントに制作を続けている作家として、**田中美和**（絵画）、**岸本吉弘**は今年もトアロード画廊で個展を開き、重厚な作品が評価された。**児玉靖枝**（絵画）もコンスタントに個展を開催、日本画的な要素も交えた具象は独特。ベテラン・**金月炤子**は大阪のラッツギャラリーで個展を開催、ひとつ抜き出た世界を発表した。エコールド神戸にも参加している**花房完昇**（絵画）、具象界の大物・**大竹茂夫**、**船井裕**、本賞の選考委員の一人でもある**河崎晃一**。現代アートでは、昨年県立美術館の「人生★劇場」にも出品、老婆が語る祖母の記憶という独自の世界を生み出した**やなぎみわ**は、世界で活躍している。

作家団体に話が進み、CAP HOUSEの活動が話題になった直後、**塚脇淳**（造形）の名前が挙がった。CAP HOUSEプロジェクトでも中心となって活動し、また鉄を使った肉体的な作品制作など、実績はありすぎるほど。今まで授賞しなかったことがおかしいとの意見も出され、満場一致で塚脇淳への授賞が決定した。

歴代受賞者

1. 山口牧生〈彫刻〉
2. 丸本　耕〈造形〉
3. 小西保文〈洋画〉
4. 藤原向意〈版画〉
5. 斎藤　智〈平面〉
6. 鄭　相和〈洋画〉
7. 山本文彦〈洋画〉
8. 堀尾貞治〈造形〉
9. 榎　忠〈造形〉
10. 松谷武判〈版画〉
11. 木下佳通代〈平面〉
12. 宮崎豊治〈造形〉
13. 藤原志保〈平面〉
14. 武田則明〈建築〉
15. 石川晴久〈平面〉
16. 松原政裕〈平面〉
17. 植松奎二〈造形〉
18. 松本　薫〈彫刻〉
19. 杉山知子〈造形〉
20. 田中　昇〈彫刻〉
21. 坪田政彦〈絵画〉
　木津文哉〈絵画〉
22. 片山みやび〈版画〉
23. 牛尾啓三〈彫刻〉
24. 中井浩史〈絵画〉
25. 奥田善己〈絵画〉
26. 赤崎みま〈写真〉
27. 宮崎みよし〈造形〉
28. 上前智祐〈造形〉
29. 上村亮太〈造形〉
30. 内藤絹子〈造形〉
31. 山口さとこ〈造形〉

From the Earth "family" BUSAN BIENNALE SCULPUTURE PROJECT KOREA 2002」

■推薦のことば

塚脇淳は、一貫して鉄に取り組んでいる彫刻家である。その経歴は、1979年の京展での美術懇話会賞受賞に始まり、エンバ賞美術展の優秀賞、札幌の本郷新賞受賞など全国的にわたり、すでに現代彫刻を代表する作家のひとりとしての評価が確立している。

彼の神戸でのデビューは、1984年兵庫県立近代美術館で開催された「アート・ナウ84」であった。この時の「アート・ナウ」展は、杉山知子や松井智恵ら新しい女性作家たちの登場の場としての印象が強いが、塚脇もまた同じ会場の一角を占めていたのである。彼の作品は、太い鉄の棒を捻じ曲げたものであったが、いずれも作品そのものが重力に抗するかのような形体を持ち、見るものに圧倒的なパワーを感じさせた。頑丈な鉄の棒をハンマーでたたいて曲げていくという単純な作業は、体ごと物質にぶつかっていくというすさまじいエネルギーと原始的体験に近いなにものかを感じさせる。そうした意味で塚脇は、現代に数少ない本格派の彫刻家と言えよう。昨年は韓国の釜山ビエンナーレに参加、また近年は神戸のCAPハウスでの運動に関わるなど、その活動の舞台はますます深さと幅を増しつつある。彼の宣言する「ニュー・ヘヴィー」という言葉が、その志向する彫刻のありようを象徴的に物語っているのだろう。

〈中島徳博〉

●第三十二回 **ブルーメール賞**〈舞台芸術部門〉

小寺流伝承の確証

小寺一登代に

■選考委員

佐野漣箕さん
〈元神戸新聞取締役文化事業局長〉

岡田美代さん
〈演出家〉

山本忠勝さん
〈神戸新聞編集局長〉

■選考経過

昨年のさまざまな舞台から、邦舞では**若柳吉恵楓**の「連獅子」（第60回記念金鈴会）、**花柳呂月**「山姥」、**花柳芳一**「助六」、**大和尚蒔**「菊の露」「鉄輪」、そして**小寺一登代**「月慈童」、第35回紫月会での**花柳五三輔**「ふるさとの民謡」は酒造唄や佐渡おけさを使った構成のすばらしさが評価された。能・狂言では**善竹忠一郎**「比丘貞」、「望月」を披いた**笠田昭雄**、上田兄弟会の**上田貴弘**、**拓司**、**公威**、**大介**の今後に期待の声が。演劇では**鶴岡大歩**の京都公演「カタストロフィ」、**劇団四紀会**が山本周五郎の名作に取り組んだ「さぶ」。洋舞では急逝した**江川のぶ子**に授賞叶わなかったことが惜しまれるとの声も。**貞松・浜田バレエ団**特別公演「ドン・キホーテ」では団員の実力とともに、急遽代役出演した東京バレエ団の**高岸直樹**に話題が集中。2002洋舞スプリングコンサートで、加藤きよ子作品を躍った**平井麻衣**、藤田佳代舞踊研究所モダンダンス公演で、自身の作品「八千八声」を躍った**向井華奈子**。若手の名前が続々登場したが、結果、堅実な活動と素直な踊り、とりわけ名流舞踊の会での「月慈童」の舞いが評価され、小寺一登代に授賞が決定。

歴代受賞者

1. 花柳芳恵一子〈邦舞〉
2. 若柳吉由二〈邦舞〉
3. 吉井順一〈能楽〉
4. 花柳芳五三郎〈邦舞〉
5. 花柳吉叟〈邦舞〉
6. 藤間緑寿郎〈邦舞〉
7. 尾上菊見〈邦舞〉
8. 藤井徳三〈能楽〉
9. 海野光子〈仮名手庵歌舞伎〉
10. コメディ・ド・フーゲツ〈演劇〉
11. 加藤きよ子〈モダンダンス〉
12. 藤田佳代〈舞踏〉
13. 花柳五三輔〈邦舞〉
14. 白羽弥仁〈映画〉
15. 松本尚蒔〈邦舞〉
16. 楠本喬章〈笑クリエイト社〉
17. 東仲一矩〈フラメンコ〉
18. 久田徹二〈能楽〉
19. 大和楽蘭の会〈邦楽〉
20. 貞松・浜田バレエ団
21. 花柳芳圭次〈邦舞〉
22. 劇団四紀会〈演劇〉
23. 貞松正一郎〈バレエ〉
24. 善竹忠一郎〈狂言〉
25. 花柳小三郎〈邦舞〉
26. 若柳吉金吾〈邦舞〉
27. 太田由利〈バレエ〉
28. 善竹隆司・隆平〈狂言〉
29. 上甲裕久〈バレエ〉
30. 藤間莉佳子〈邦舞〉
31. 阿藤久子〈フラメンコ〉

■推薦のことば

舞踊という身体行動は伝承される以外にとどめ得ないものです。小寺流のすべてが小寺一登代師に伝承されています。

小寺流は昭和十年、小寺一枝師が初世家元として、姫路藩堂上の御殿儛から分流創始された「儛」の流派です。現在小寺倭代師が二世家元です。小寺流は「能」を基盤とした御殿儛からの分流ですから、基本理念は「花」です。静と動、形からくる精神性、手、足、腰の構えの直線的な方正、呼吸の自然、熱意と力量の調和、つまり、動かんようにして動いて舞う「本行」の秩序が生命なのです。このことは、そのままに小寺一登代師の舞踊そのものの評値です。小寺一一師とお二人できっちり継承されて貴重です。

昨年、一登代師の「月慈童」の風姿に、その「開花と凝結」があり、あの流れるように踵の上がる足（白足袋）の刻む運びの美しさと緊張感などはお見事、そこに無類の伝承の確証がありました。

受賞を機としてさらなる「大いさ」を期待します。

〈佐野漣箕〉

第51回名流舞踊の会　大和楽「月慈童」より
（神戸国際会館こくさいホール・2002年3月3日）

●第三十二回 **ブルーメール賞**〈ファッション部門〉

世界的な評価を受けるジュエリーデザイナー

内海和子に

■選考委員

見寺貞子さん
〈神戸芸術工科大学助教授〉

岸上龍平さん
〈神戸ファッション協会部長〉

鈴木章子さん
〈神戸ファッション専門学校校長〉

藤本ハルミさん
〈デザイナー〉

■選考経過

昨年までの授賞者を振り返り、神戸ファッション協会やVEGAなど団体での授賞が続いていることに触れられ、今回はぜひ個人へ授賞をとの声が。第一に挙がったのが田崎真珠商品企画デザイン部部長の**内海和子**。世界的に活躍し、神戸のファッション業界の誇りであると意見が出された。

神戸デザイナーコンポーズドで話題を集めた**三木勧也**。学生や若手デザイナーの作品を集めて選考し、売り場を提供するという栄町を中心とした「**ドラフト!**」。クラフトマンたちが年に一度トアロードに出店する**トアロードクラフトアートフェア**。神戸エレガンスの帽子を作りつづけるマキシンは、社長の**渡邊百合**、そして授賞に値するマイスター誕生に期待。ヘアデザイナーの中では、**アレックス楊**、「IMAII bella fons」の**今井英夫**の名前が挙がった。着物の染色家・**庄瀬まき**。黒田庄町の商工会議所主催で、播州織りなど地元工芸品を扱った「**KTファッションショー**」も評価。今年は神戸市がファッション都市宣言をして30年にあたり、宣言をした神戸市そのものへの感謝の声も挙がった。婦人服、紳士服、帽子、靴、洋菓子など神戸ファッションのすぐれた技術をどう引き継いでいくか。そのためにも、会社の中の個人、団体の中のマイスターを評価していくべきとの意見が出された。

歴代受賞者

1. 藤本ハルミ〈デザイナー〉
2. 米田博司〈神戸市心身障害者福祉センター〉
3. 市野木悦子〈ニットデザイナー〉
4. KLTC〈コウベジュニアテーラーズ〉
5. 太田タマコ〈アートフラワー〉
6. K.F.S.〈コウベファッションソサエティ〉
7. 「真珠の街・神戸」を考えるプロジェクトチーム〈パール〉
8. 神戸市家具青年会〈家具〉
9. K.F.M.〈コウベファッションモデリスト〉
10. 望月美佐〈書道家〉
11. K.F.C.〈コウベファッションクリエーターズ〉
12. 村上和子〈ジャーナリスト〉
13. 中村一夫〈デザイナー〉
14. 柴田音吉〈柴田グループ代表〉
15. 丹野最世子〈デザイナー〉
16. 大西節子〈デザイナー〉
17. 福井恵子〈旗の作家〉
18. 服部メガネ店〈メガネ〉
19. 佐藤悦枝〈アートフラワーデザイナー〉
20. 山本芳樹〈ホテルゴーフルリッツファッションライブラリー館長〉
21. 大丸神戸店〈百貨店〉
22. 今岡寛和〈神戸ルミナリエ作品プロデューサー〉
23. (財)神戸ファッション協会
24. VEGA〈ジャヴァグループ〉
25. シューズプラザ〈くつのまちながた神戸〉

■推薦のことば

内海和子さんとは、私達ＫＦＭ（コウベファッションモデリスト）結成の第一回のファッションショーの時、田崎真珠のデザイナーとして、パールとのドッキングの相手として出会いました。

当時はまだ日本の景気は上向きでのんびりしていたので、宝飾のデザイナー達も、そのシーンのために頭飾りやネックレスを作り、内海さんはいつもいかにもプロらしいデザインで私達を感心させました。

彼女のその後の活躍は群を抜いていて、パールコンテストはグランプリを始め、十回以上の受賞を受け、ダイヤモンドインターナショナル賞は四回の受賞、世界で六十六人目、日本では六人目のダイヤモンド・インターナショナル・アカデミー会員となったのです。

彼女のデザインの特徴は、日本人らしくヨーロッパの立体に対して日本の平面の美を主張し、身につけた時その体の一部のように、胸元により添いその体形になじんでいく。特にダイヤのデザインは今までにない新天地を開き、このクリエイティブなデザインの評価が世界的なアカデミー会員の誕生となったのです。

引く手あまたの中で、彼女はそんな事には少しも動じず、田崎真珠にどっしりと腰をすえ、制作を続けています。

彼女こそはコウベの誇りであるばかりでなく、日本の誇りであると思っています。〈藤本ハルミ〉

2002年カンヌ映画祭チャリティショー出品作品「さくら」（2億円）
（日本からの出品は田崎真珠のみ）

■ドクターインタ

鐘紡記念病院院長

上羽康之先生

神戸風の
おしゃれで
人間ドック

鐘紡病院に人間ドックが出来たと聞いたので、2月20日兵庫の御崎町に出かけた。立派な前栽のある病院で、ロビーに入るとサロンコンサートが開かれている。明るいおしゃれなイメージに驚いてピアノと唄に耳を傾けた。

人間ドックは、さらにセンスのいい、品格のあるインテリアで、すらりと長身の坂上庸一郎所長と笑顔のすてきな浅井敦子さんに案内された。さらに院長上羽康之さんは、スケールといい話ぶりといい、さすが。名医とはこんな方かと感じ入った。

ー名医かどうかすぐ判るそうですね。

そう、患者のベッドにやってきて腰掛に座って話を聞いてくれる。立ったまま済ますというのは、アカンのですわ。

先だって、ぼくの友達が肺ガンで入って来た。お袋が94才。それでぼくは、お袋を見送ることを目標に直して行こうやといいました。

息がつまるタイプと、ゆっくり進行するタイプがあるそうやけど、ぼくはどっちや。それは判らんが、楽に死ねるようにしてやるから、お袋を見送るまではがんばれよな。うん判った。子供は女の子でしっかりしてる。母親にはいわんときます、というていたけれどもういいましたので、先生にゲタをあずけますからよろしくお願いします。しっかりしてる娘は。

病院にきて、もうガンが散っているので助かる見込みありませんというてしまったら終りやからね。

ー鐘紡病院の看護婦さんは美しい方が多い

今の日本の社会は男が強いですからね。患者さんも55%男ですわ。看護婦さんは美しい方が患者も元気が出るでしょう。注射でも看護婦さんにしてもらいたいの（笑）。

ぼくの友達とこは開業医やのに、5人も看護婦さんがいる。大阪やけどね。よく患者さんが来て流行ってます。何のことはない皆美人の看護婦さんに見てもらいたい（笑）。それでも辞めていったら後どないすんねんいうたら、何とあそこは美人の看護婦さんしか雇わへんいうたらちゃんと来る（笑）。どっと来るから、その中から選んだらええねん（笑）。この医者は人生の達人や思いますね（笑）。

ー私も兄や友達が神戸市民病院や、神鋼病院に入院し

体感！発見！
いのち・心を考える
ひと未来館
2002年にオープンした防災未来館は阪神・淡路大震災を伝え防災のあり方を伝える展示でその大震災で再認識した「いのちの尊さと共に生きることの素晴らしさ」を体感できるのがひと未来館だね
楽しめる所だよ
いい香りー
人のこころとからだの不思議を解明しそのしくみがわかります
脳のはたらきや感情のことがわかるんだね
インストラクターといっしょに音楽の演奏や遊びに参加しよう
みんなでやるとおもしろいな
なんだかホッとするね
多様な生命の相互関係命を伝える大切さ
未来の自分へメッセージが発せるよ
大型3Dハイビジョンで命の大切さ・勇気を知ることができます
わっ風だ
耳元でささやいたよ
2Fで防災未来館とつながってるよ
しストランもあるんだッ
いろんな生きものが生きてるんだ
イラスト　佐藤晴美